

良弁と『続日本紀』

牧 伸 行

一

良弁については、草創期の東大寺にあつて寺家を代表する僧であり、かつ僧綱にもその名を列ねていることなどから、奈良時代を代表する僧の一人であつたといえる。そして、良弁の名は、『続日本紀』には次に挙げる四箇所に散見する。

①天平勝宝三年（七五一）四月甲戌（二二日）条

甲戌。詔以_二菩提法師_一爲_二僧正_一。良弁法師爲_二少僧都_一。道璿法師隆尊法師爲_二律師_一。

②天平勝宝八歳（七五六）五月丁丑（二四日）条

丁丑。勅。奉_二爲先帝陛下_一屈請看病禪師一百廿六人者。宜_レ免_二當戸課役_一。但良弁。慈訓。安寛三法師者。並及_二父母

兩戸_一。然其限者終_二僧身_一。又和上鑒眞。小僧都良弁。華嚴講師慈訓。大唐僧法進。法華寺鎮慶俊。或學業優富。或戒律清淨。堪_二聖代之鎮護_一。爲_二玄徒之領袖_一。加以。良弁。慈訓二大德者。當_二于先帝不豫之日_一。自盡_二心力_一。勞_二勤晝夜_一。欲_レ報_二之德_一。朕懷_レ罔極。宜_下和上小僧都拜_二大僧都_一。華嚴講師拜_二小僧都_一。法進。慶俊並任_中律師_上。

③天平宝字四年（七六〇）七月庚戌（二三日）条

庚戌。大僧都良弁。少僧都慈訓。律師法進等奏曰。良弁等聞。法界混_一。凡聖之差未_レ著。斷證以降。行住之科始異。三賢十地。所以開_二化衆生_一。前佛後佛。由_レ之勸_二勉_三乘_一。良知。非_レ酬_二勲庸_一。無_レ用_二證眞之識_一。不_レ差_二行住_一。詎勸_二流浪之徒_一。今者。像教將_レ季。繼侶稍怠。若无_二衰

貶^一。何顯^二善惡^一。望請。制^二四位十三階^一。以按^三三學六宗^一。就^二其十三階中^一。三色師位并大法師位。准^三勅授位記式^一。自外之階。准^三奏授位記式^一。然則戒定惠行非^二獨昔時^一。經論律旨方盛^二當今^一。庶亦永息^二濫位之譏^一。以興^二敦善之隆^一。良弁等。學非^二涉獵^一。業惟淺近。輒以^二管見^一。略事^二採擇^一。叙位節目。具列^二別紙^一。勅報曰。省^二來表^一知^二具示^一。勸^二誠緇徒^一。實應^二利益^一。分^二置四級^一。恐致^二勞煩^一。故其修行位。誦持位。唯用^二一色^一。不^レ爲^二數名^一。若有^二誦經忘却^一。戒行過失者^一。待^二衆人知^一。然後改正。但師位等級。宜^レ如^二奏狀^一。

④宝龜四年（七七三）閏十一月甲子（二二日）条

甲子。僧正良弁卒。遣^レ使用^レ之。

これらのうち、本稿において問題としたいことは④の記事、すなわち卒去記事になぜ伝記が掲載されていないのかという点である。

先ず右の四箇条をそれぞれ簡単に見てみると、大きく分けて①と②は僧綱の補任記事である。『続日本紀』には僧綱の補任記事は全部で二五例が掲載されており、すでに中井真孝氏によりその全てに詳細な検討が行われているが、当然この二箇条についてもその中で触れておられる。①が単に各僧綱員の補任記事のみが記されているのに対して、②は聖武太上天皇崩御に際

しての褒賞に関する記事であり、僧綱の補任以外の記事も含んでいる。すなわち、先ず聖武太上天皇崩御に際して尽力した一二六人の看病禪師が褒賞され、次に特に良弁・慈訓・安寛の三人に対しては本人のみならず、父母の課役も免除されるなどの優遇措置が行われている。そして、これに続いて僧綱の補任が行われて、良弁は豎真とともに大僧都に補任されたことが記されている。

ところで、『続日本紀』や『僧綱補任』による限り良弁は律師を経ず少僧都に直任されたと考えて差し支えないが、『七大寺年表』にのみ少僧都補任以前の天平一七年（七五四）条の律師の項に良弁の名が見える。そして、良弁に付けられた注記には、

或本^三天平勝寶直任^二少僧都^一。云云。正月廿一日任。華嚴宗。東大寺。相模國人。百濟氏。義淵僧正弟子。有山寺根本也。

とあり、『或本』の少僧都への直任説が記されているが本来の記事としては律師への補任が記されているのである。しかし、この時の律師就任に関しては他の史料には見えず、しかもこの「正月廿一日」という日付は『続日本紀』天平一七年正月己卯（二二日）条に見えるように、行基が大僧都に直任された日に当たるが『続日本紀』では、

己卯。詔以「行基法師」爲「大僧正」。

と行基の大僧正補任が記されるのみであり、他の僧綱員の補任記事は見えない。これに対し『七大寺年表』の記載は平安時代以降には僧都以上への直任が少なくなるという傾向によって、良弁も当然律師を経ていたであろうという前提の下で造作されたものと考えられる。そして、行基の大僧正補任と同時に良弁の律師補任が行われたと考えられたのは、良弁と行基が共に後世東大寺の四聖と称されていることにも起因しているのである。

また、良弁の少僧都及び大僧都の補任に関しては、①と②に記されているが、僧正の補任については、中井氏も指摘しておられるように『続日本紀』の記事からは漏れている^③。そして、良弁の僧正就任時期については諸説が存在するが、このことについては、すでに岸俊男氏が『正倉院文書』を検討されて天平宝字八年（七六四）九月一日から一三日までの間に大僧都から僧正に進んだという指摘をしておられる^④。さらに、この時期については、「恵美押勝の乱が勃発した政治的に微妙な時点」^⑤であり、実際『続日本紀』においては恵美押勝の乱の経過に紙面が割かれている。そのため、良弁の僧正就任記事が欠落したものと考えられる。

次に、③は僧綱による僧位制定に関する奏上およびその報勅

が記されている。そして、僧綱が奏上した四位一三階の僧位に關しては、石原正明・山田英雄^⑥両氏により二説が提起されており重要な問題を含んでいるが、この場合「大僧都良弁。少僧都慈訓。律師法進等」とあるようにあくまでも良弁は僧綱の一員として名を列ねているのであり、良弁個人による奏上ではない。ただし、良弁が僧綱として行った綱務が正史に記された唯一の例といえる。

最後に、④が問題となる卒去記事である。しかし、先にも述べたが、良弁に関しては単に卒去の事実と使の派遣については記されているものの、伝記いわゆる卒伝が記されていない。そして、卒伝が存在しないことが、後世の良弁伝に説話的要素が加味される要因の一つとなったといえる。例えば、良弁の出自に關しては諸本により相違があり、伝記の中で共通するものとしては「鷲の育て子」伝説が取入れられていることが挙げられる。ここで、諸良弁伝の中でも最も早く成立したであろうと考えられるものの一つである『東大寺要録』巻一本願章に収められた良弁伝をみてみると、

根本僧正^{諱良弁}

僧正者相模國人漆部氏。持統天皇^{治三年己丑誕生}。義淵僧正弟子。金鷲^寺是也。天平五年建^二金鐘寺^一。

天平勝寶三年任^二少僧都^一。六十三。同六年十月十三日兼^二

法務^一年六十六。同八年任^二大僧都^一年六十八。

寶龜四年補^二僧正^一年八十五。同年潤十一月十六日入滅。

同十九日拾^二遺骨^一送^二宇多賀幡山^一。云々。

耆老相傳云。根本僧正昔嬰兒之時。於^二坂東^一爲^二鷺鳥^一被^レ取未^レ知^二行方^一。依^レ之父母大歎流^二浪諸國^一。而伴兒被^レ落^二山城國多賀邊^一。彼鄉人取^レ之養育。漸以成長。即根本僧正是也。御寺建立之時。爲^二聖朝師^一。威德巍巍住^二東大寺^一。其時彼父母尋來陳^二此由^一。先問^二身驗^一。脇下有^レ驗。于^レ所陳有^レ實之上。被^レ取^レ鷺事而符合。仍始知^二父母及子^一。悲喜滿^レ胸。啼淚潜然^{云々}。

又相傳云。良弁僧正彌勒^二之化身^{云々}。見^二八嶋記^一。云々。とあり、「耆老相傳云」として「鷺の育て子」伝説が記載されており、遅くとも『東大寺要録』の成立した嘉承元年（一一〇六）頃にはこの説話が成立していたことが明かとなる。「鷺の育て子」伝説を含めて良弁の出自などについては、松本信道氏によつて詳細な考察が行われていおり、¹⁰それに従つて以下に簡単にみてみると、先ず出自であるが史料の系統により次の三説が挙げられる。

- イ、相模国漆部氏説：『東大寺要録』系統
- ロ、相模国百濟氏説：『七大寺年表』天平一七年条の注
- ハ、近江国百濟氏説：『元亨釈書』

すなわち、良弁の出身地および出身氏族に関しては多くの研究者によつて考察されているが、出身氏族である百濟氏説は『僧綱補任』や『七大寺年表』にみえる「相模國。百濟學生。」という記事からの錯簡のようである。また、出身地である近江国説についても、良弁と石山寺との関係が必要以上に強調された結果であり、相模国漆部氏出身とするのが妥当であろう。

また、良弁の「鷺の育て子」伝説については、『日本靈異記』等に見える「鷺の育て子」伝説や金鷺優婆塞を良弁に仮託結合させて形成されたものと指摘されている。¹¹つまり、『日本靈異記』では、「鷺の育て子」に関する説話は上巻第九話に、金鷺優婆塞の説話は中巻第二一話に収録されており、元来別々であるべき説話が『東大寺要録』等において結合されているのである。ただし、『日本靈異記』においては金鷺優婆塞とのみ見え、良弁の名自体が記されていないことから、この段階では金鷺優婆塞と良弁が結び付けられていない可能性はあるが、この中巻第二一話の説話は『日本靈異記』においては明らかに東大寺の起源説話として述べられており、金鷺菩薩と良弁が同一人物であつたという了解があつたのではないだろうか。このことに関して、松本氏は『日本靈異記』の作者である景戒の年齢から考察を行われて、良弁入滅時に景戒が一六歳という「ものごころのついてゐる年」であるという久野健氏の見解¹²を引用さ

れて、金鷲優婆塞と良弁が同一人物であるならば「当然良弁の名を記すはず」として別人説を提起しておられる。¹³⁾

しかし、『日本靈異記』の説話集という性格から考えるならば、例えば行基のように各個人の説話が意味を持つ場合はその個人名が重要であることが考えられるが、この説話の場合は東大寺が創建されるに至る契機が問題となっているのである。つまり、説話自体が金鷲優婆塞が出家したこのみが主題として記されるのではないと考える。確かに、出家の機縁となった金鷲優婆塞本人の信仰が描かれているが、むしろその信仰の対象であった「執金剛神の摂像」の靈驗譚を示すものであるということが主題となっているのである。付け加えるならば、東大寺の創建に関して、「執金剛神の摂像」の靈威とともに創建の願主としてはむしろ聖武天皇の存在が強調されている。つまり、説話自体としては卷中第二一話に付けられた「攝神王躡放」光示「奇表」得「現報」という題名、あるいは本文に記された「贊」に「善哉金鷲行者、信燧攢「東春」、熟火炬「西秋」、躡光「扶感火」、人皇慎「驗瑞」とあることから明らかなように、優婆塞である金鷲が執金剛神の靈驗によつて天皇の勅により得度¹⁴⁾が許可され、官僧となったということを記すことにより、あくまでも優婆塞が官僧となるに至った執金剛神の靈驗に重点が置かれているといえる。

以上から、良弁に関しては既に平安時代初期には説話化される要素が多分に存在していたといえるが、『続日本紀』に卒伝が記されていないことがこれに拍車をかける要因の一つではないかと考えられる。そして、その良弁の卒伝が収録されていないことに関しては、「延暦期の律令国家の良弁に対する評価と密接にかかわる重要な問題」とする指摘が存在する。¹⁵⁾確かに、『続日本紀』が桓武朝に編纂されていること、あるいはその編纂過程を考慮するならば政治的な影響も確かに認められることはあるが、むしろ『続日本紀』自体の編纂過程あるいは編纂材料に起因するという想定も可能となる。

二

六国史を通して収録されている伝記については坂本太郎氏が、『続日本紀』の伝記記事全般については、林陸朗氏¹⁶⁾によつて考察が行われており、両氏の指摘に従い、先ずその概略についてみていきたい。

『続日本紀』において薨卒記事の掲載に関しては一定の原則が存在しており、位階に関しては若干の例外があるものの四位以上という規定が存在していた。そして、林氏は薨卒記事の分類を行われて、

A型…単に薨卒の事実だけを記載

B型…A＋係累的な記事が加えられている

C型…B＋伝記的な記事を有する

と、薨卒記事を三種に区分した上で、この中で『続日本紀』に収録されている伝記記事、すなわち人物の死去に際して付けられる伝記いわゆる薨卒伝はC型が相当すると指摘しておられる。さらに、『続日本紀』全体では薨卒が記されているものは総計二九四名であり、そのうちA型は一五三名・B型は八六名・C型は五五名となるという統計を出しておられる。¹⁷すなわち、薨卒伝が記されているもの（C型）は全体の約一八・七パーセントであり、全体の二割にも満たない。この数字によつて、『続日本紀』編纂の段階で薨卒伝の掲載についてなんらかの基準が存在していたのではないかとということが想定できる。

では、『続日本紀』をはじめとして六国史において薨卒伝の編纂材料となる史料とはどのようなものであったのか。それについては、職員令の式部省条にみえる式部卿の職掌には、
掌_下内外文官名帳。考課。選敘。禮儀。版位。位記。校_二定勲績_一。論_レ功封賞。朝集。学校。策_二試貢人_一。禄賜。假使。補_二任家令_一。功臣家傳田事_上。

という規定が存在するが、その中の一つに「功臣家傳田事」ということがある。ここに見える家伝は狭義の伝記のことである。¹⁸

ただし、「田」の一字によつて解釈が難しいものになっているようではあるが、「功臣の家伝、田の事」という訓みに従いたい。¹⁹さらに、この「功臣家傳」について『令集解』が引用する注釈の諸説には、

謂有功之家。進其家傳。省更撰修。釋云。家傳書名也。假如。三史列傳之類。跡云。家傳功臣之子孫嫡々相繼狀注置也。古記云。三位以上。或四位以下。五位以上有_レ可_レ爲_二功臣也_一。如_二漢書傳_一也。禄令云。五位以上。以_レ功食_レ封者。其身亡者。大功減_レ半傳_三三世_一。上功減_三三分之二_一傳_二二世_一。中功減_三四分之三_一傳_レ子。下功不_レ傳也。田令云。功田。大功世々不_レ絶。上功傳_三三世_一。中功傳_二二世_一。下功傳_レ子也。

とあり、「田」の解釈を記さないものが多く「家傳」の解釈に終始しているが、「家傳」に関してはほぼ伝記を指していると考えてよいであろう。また、その中で唯一「田」の解釈が記されている古記によると「傳」と「田」それぞれに注釈が為されており、それぞれが功臣家伝と功臣家田というように解釈すべきである。

そして、『令義解』によれば、提出された家伝は省においてさらに編纂作業が行われており、『続日本紀』に限らず六国史に掲載される薨卒伝は諸家から提出されていた史料が編纂材料

として採り入れられていたと考えられる。つまり、功臣については家伝の提出が義務付けられていたようであり、また古記によるとその基準は三位以上はすべて、もしくは四位五位にあつても場合によつては伝記の提出が行われていたようであり、薨卒伝の有無についてはその人物の伝記の有無ということに起因するのではなく、むしろ編纂段階における編纂者の選択によるところが大きいということになる。

また、国史編纂に際して僧侶の場合もその伝記を家伝の一種と称して国史所に奉つたということを坂本氏は、『智証大師伝』に「延喜二年戊戌十一月十九日」の日付で記された識語に、²⁰⁾以「前家伝綱所牒」。清「書一本」。奉「国史所」已訖。仍記。

とあることから、さらに光定・円仁・真済などの例を挙げて指摘しておられる。²¹⁾

ここで、『続日本紀』における僧侶の場合についてみてみると、僧侶に関しては卒去の記事が記されているものは良弁を含めて道照²²⁾・義淵²³⁾・道慈²⁴⁾・玄昉²⁵⁾・行基²⁶⁾・鑑真²⁷⁾・道鏡²⁸⁾の八名であり、その中で卒伝が記されているものは良弁・義淵を除く六名である。しかし、奈良時代を通じての僧侶の数を考慮してみた場合、八名の卒去記事まして六名の伝記しか記されていない。確かに、八名中六名に卒伝が記されているということは、いずれも僧綱

に補任されていた者であり、僧だけでみた場合の割合自体は四分の三と卒去記事における卒伝記載の割合は大きい、むしろ僧侶の卒去記事に関しては多いとはいえない。すなわち、奈良時代を通じて存在していた僧侶の数の割合からいうとほとんどゼロに近い数字であるといえる。若干の遺漏があるものの『続日本紀』に記されている僧綱の補任記事二五例に記されているものは全四二名であり、卒伝の記されているものは全体の約一四パーセントであり、卒去の記されているものでも全体の約一九パーセントにしか過ぎない。これは、僧綱に補任された者という限られた中での数字であつても、全体の五分の一にも満たない数字である。

ところで、薨卒伝掲載に関しては一定の基準があつたように、僧侶の卒去記事の記載についても当然何らかの基準があり、その結果八名が選ばれ、さらに六名に卒伝が付されることになつたと考えられる。その基準について、林氏はただ単に僧綱であつたという理由ではなく、卒伝が記された六名に関しては宗教の伝来者あるいはその経歴などが基準となっており、特に『続日本紀』が編纂された延暦年間の特異な関心があつたことを指摘しておられる。²⁹⁾

実際に『続日本紀』の編纂に際して、僧侶の伝記も例外なく「功臣家傳」として提出されたものが用いられた可能性はある

が、その掲載の状況を考えると僧侶に関しては卒伝は勿論のことであるが卒去記事自体の掲載についても、さらに何か別の基準があったと考えられる。しかし、良弁の場合について卒去記事自体が掲載されているということは、本来掲載されるべきであった卒伝が何らかの理由で掲載されなかったと考えることも可能であり、むしろそう考えた方が合理的ではある。ただし、卒去記事が掲載されたのは良弁自身に対しての評価の現われであり、その事のみで良弁の評価は決して低いものであったとはいえず、むしろなぜ卒伝が掲載されていないのかということが重要であろう。

では、ここで煩雑ではあるが以下に『統日本紀』に掲載されている六名の僧の卒伝を挙げる。

a 道照：『統日本紀』文武四年（七〇〇）三月己未（一日）条

三月己未。道照和尚物化。天皇甚悼惜之。遣使弔賻之。和尚河内國丹比郡人也。俗姓船連。父惠釋少錦下。和尚戒行不_レ缺。尤尚忍行。嘗弟子欲_レ究其性。竊穿_二便器_一。漏汚_二被褥_一。和尚乃微笑曰。放蕩小子汚_二人之床_一。竟無_二復一言_一焉。初孝德天皇白雉四年。隨_レ使入唐。適遇_二玄奘三藏_一。師受_レ業焉。三藏特愛。令_レ住_二同房_一。

謂曰。吾昔往_二西域_一。在_レ路飢乏。無_二村可_レ乞。忽有_二沙門_一手持_二梨子_一。与_レ吾食之。吾自_レ啖後氣力日健。今汝是持_レ梨沙門也。又謂曰。經論深妙不_レ能_二究竟_一。不_レ如學_二禪流_一傳東土。和尚奉_レ教。始習_二禪定_一。所_レ悟稍多。於_レ後隨_レ使歸朝。臨_レ訣。三藏以_二所_レ持舍利經論_一。咸授_二和尚_一而曰。人能弘_レ道。今以_二斯文_一附屬。又授_二鐺子_一曰。吾從_二西域_一自所_二將來_一。煎_レ物養_レ病。無_レ不_二神驗_一。於_レ是和尚拜謝。啼泣而辭。及至_二登州_一。使人多病。和尚出_二鐺子_一。暖_レ水煮_レ粥。遍与_二病徒_一。當日即差。既解_二纜順風_一而去。比_レ至_二海中_一。船漂蕩不_レ進者七日七夜。諸人怪曰。風勢快好。計_レ日應_レ到_二本國_一。船不_二肯行_一。計必有_レ意。卜人曰。龍王欲_レ得_二鐺子_一。和上聞_レ之曰。鐺子此是三藏之所_レ施者也。龍王何敢索_レ之。諸人皆曰。今惜_二鐺子_一不_レ与。恐合_レ船爲_レ魚食。因取_二鐺子_一拋入_二海中_一。登時船進還_二歸本朝_一。於_二元興寺東南隅_一。別建_二禪院_一而住焉。于_レ時天下行業之徒。從_二和尚_一學_レ禪焉。於_レ後周_二遊天下_一。路傍穿_レ井。諸津濟處。儲_レ船造_レ橋。乃山背國宇治橋。和尚之所_二創造_一者也。和尚周遊凡十有餘載。有_二勅請_一還止_二住禪院_一。坐禪如_レ故。或三日一起。或七日一起。倏忽香氣從_レ房出。諸弟子驚怪。就而謁_二和尚_一。端_二坐繩床_一。无_レ有_二氣息_一。時年七十有二。弟子等

奉^レ遺教^一。火^二葬於粟原^一。天下火葬從^レ此而始也。世傳云。火葬畢。親族与^二弟子^一相爭。欲^下取^二和上骨^一斂^レ之。飄風忽起。吹^二颺灰骨^一。終不^レ知^二其處^一。時人異^レ焉。後遷^二都平城^一也。和尚弟及弟子等奏聞。徙^二建禪院於新京^一。今平城右京禪院是也。此院多有^二經論^一。書迹楷好。並不^二錯誤^一。皆和上之所^二將來^一者也。

b 道慈：『統日本紀』天平一六年（七四四）一〇月辛卯（二日）条

冬十月辛卯。律師道慈法師卒。天平元年
爲律師法師俗姓額田氏。添下郡人也。性聰悟爲^レ衆所推。大寶元年隨^レ使入唐。涉^二覽經典^一。尤精^二三論^一。養老二年歸朝。是時釋門之秀者唯法師及神叡法師二人而已。著^二述愚志一卷論僧尼之事^一。其略曰。今察^二日本素縊行佛法軌模全異大唐道俗傳^一聖教法則^一。若順^二經典^一。能護^二國土^一。如違^二憲章^一。不^レ利^二人民^一。一國佛法。万家修善。何用^二虛設^一。豈不^レ慎乎。弟子傳^レ業者。于^レ今不^レ絕。屬遷^二造大安寺於平城^一。勅^二法師勾當其事^一。法師尤妙^二工巧^一。構作形製皆稟^二其規模^一。所^レ有匠手莫^レ不^二歎服焉^一。卒時年七十有餘。

c 玄昉：『統日本紀』天平一八年（七四六）六月己亥（一八日）条

己亥。僧玄昉死。玄昉俗姓阿刀氏。靈龜二年入唐學問。唐

天子尊^レ昉。准^二三品^一令^レ着^二紫袈裟^一。天平七年隨^二大使多治比真人廣成還歸^一。齎^二經論五千餘卷及諸佛像^一來。皇朝亦施^二紫袈裟^一着^レ之。尊爲^二僧正^一。安置^二內道場^一。自^レ是之後。榮寵日盛。稍乖^二沙門之行^一。時人惡^レ之。至^レ是死^二於徒所^一。世相傳云。爲^二藤原廣嗣靈^一所害。

d 行基：『統日本紀』天平勝宝元年（七四九）二月丁酉（二日）条

二月丁酉。大僧正行基和尚遷化。和尚藥師寺僧。俗姓高志氏。和泉國人也。和尚眞粹天挺。德範夙彰。初出家。讀^二瑜伽唯識論^一即了^二其意^一。既而周^二遊都鄙教化衆生^一。道俗慕^レ化追從者。動以^レ千數。所^レ行之處聞^二和尚來^一。巷无^二居人^一。爭來禮拜。隨^レ器誘導。咸趣^二于善^一。又親率^二弟子等^一。於^二諸要害處造橋築陂^一。聞見所^レ及咸來加^レ功。不日而成。百姓至^レ今蒙^二其利焉^一。豐櫻彥天皇甚敬重焉。詔授^二大僧正之位^一。并施^二四百人出家^一。和尚靈異神驗觸^レ類而多。時人号曰^二行基菩薩^一。留止之處皆建^二道場^一。其畿內凡卅九處。諸道亦往々而在。弟子相繼皆守^二遺法^一。至^レ今住持焉。薨時年八十。

e 鑒真：『統日本紀』天平宝字七年（七六三）五月戊申（六日）条

五月戊申。大和上鑒真物化。和上者楊州龍興寺之大德也。

博涉^二經論^一。尤精^二戒律^一。江淮之間獨爲^二化主^一。天寶^二一載^一。留學僧榮叡業行等白^二和上^一曰。佛法東流至^二於本國^一。雖^レ有^二其教^一無^二人傳授^一。幸願。和上東遊興^レ化。辭旨懇至。諮請不^レ息。乃於^二楊州^一買^レ船入^レ海。而中途風漂。船被^二打破^一。和上一心念佛。人皆賴^レ之免^レ死。至^二於七載^一更復渡海。亦遭^二風浪^一漂^二着日南^一。時榮叡物故。和上悲泣失^レ明。勝寶四年。本國使適聘^二于唐^一。業行乃說以^二宿心^一。遂与^二弟子廿四人^一。寄^二乘副使大伴宿祢古麻呂船^一歸朝。於^二東大寺^一安置供養。于時有^レ勅。校^二正一切經論^一。往々誤字諸本皆同。莫^二之能正^一。和上誦誦多下^二雌黃^一。又以^二諸藥物^一令^レ名^二眞僞^一。和上一々以^レ鼻別^レ之。一無^二錯失^一。聖武皇帝師^レ之受戒焉。及^二皇太后不愈^一。所^レ進醫藥有^レ驗。授^二位大僧正^一。俄以^二綱務煩雜^一。改授^二大和上之号^一。施以^二備前國水田一百町^一。又施^二新田部親王之舊宅^一以爲^二戒院^一。今招提寺是也。和上預記^二終日^一。至^二期端坐^一。怡然遷化。時年七十有七。

f 道鏡：『続日本紀』宝龜三年（七七二）四月丁巳（七日）
条

丁巳。下野國言。造藥師寺別當道鏡死。道鏡。俗姓弓削連。河内人也。略涉^二梵文^一。以^二禪行^一聞。由^レ是入^二内道場^一。列爲^二禪師^一。寶字五年。從^レ幸^二保良^一。時侍^二看病^一稍被^二

寵幸^一。廢帝常以爲^レ言。與^二天皇不^二相中得^一。天皇乃還^二平城別宮^一而居焉。寶字八年大師惠美仲麻呂謀反伏^レ誅。以^二道鏡^一爲^二太政大臣禪師^一。居頃之。崇以^二法王^一。載以^二鸞輿^一。衣服飲食一擬^二供御^一。政之巨細莫^レ不^レ取^レ決。其弟淨人。自^二布衣^一。八年中至^二從二位大納言^一。一門五位者男女十人。時大宰主神習宜阿曾麻呂詐稱^二八幡神教^一。誑^二耀道鏡^一。々々信^レ之。有^下覬^二覲神器^一之意^上。語在^二高野天皇紀^一。泊^二于宮車晏駕^一。猶以^二威福由^レ己竊懷^二僥倖^一。御葬禮畢。奉^レ守^二山陵^一。以^二先帝所^レ寵。不^レ忍^レ致^レ法。因爲^二造下野國藥師寺別當^一。遞^二送之^一。死以^二庶人^一葬^レ之。

これらのうち、玄昉と道鏡に関してはともに「死」と記されており、他の四名とは別の理由で卒伝が掲載されているものと考えられ、両者については別の機会に稿を改めて考察を行いたい。しかし、玄昉と道鏡を除く四名については、それぞれ「今」（道照・鑑真）・「于^レ今」（道慈）・「至^レ今」（行基）と、『続日本紀』編纂時の延暦年間を指す語が記されており、編纂時における特殊な関心が基礎となっていることは認められ、さらに玄昉の場合は延暦期に高まった怨霊思想の反映であるということが指摘されている³¹。

そして、玄昉・道鏡を除く四名の卒伝であるが、中でもaの

道照とdの行基に関してはその編纂の材料となった原史料については水野柳太郎氏により、いずれも寺院縁起に類する史料いわゆる縁起様文書が『続日本紀』の材料として使用されていたことが指摘されている³²⁾。その縁起様文書は各寺院が経済的特権を要請するために提出されたものであり、『続日本紀』編纂に際して治部省に保管されていたものが用いられたものと考えられており、首肯すべきであろう。

水野氏の見解に従って道照と行基についてみると、先ず道照の場合であるが、道照に関する基本的な史料である『続日本紀』・『日本靈異記』³³⁾・『日本三代実録』³⁴⁾の比較から、『続日本紀』のみにある火葬の記事・葬儀における奇異譚・平城移建後の禅院寺および経論についての、三箇条の道照没後の記事の存在を指摘しておられる。そして、特に禅院寺関係の記事については、平城移建後の記事は必ずしも不可欠ではなく、禅院寺と道照の関係や、経論が道照を通じて玄奘に至る貴重な存在であるとの主張が含まれていることから『続日本紀』道照伝が禅院寺と密接な関係をもつことを指摘しておられる。すなわち、これは『禅院寺縁起』に掲載された道照伝からの引用であり、可能性として『延喜式』巻二六主税上の「諸国本稻条」の伊豆国に「禅院料一千束」とみえる出挙稻を獲得するために製作され、提出されたものではないかと考えておられる³⁵⁾。

また、行基の場合に関しては、「行基大僧正墓誌」（『太僧正舍利瓶記』）・『続日本紀』・『日本靈異記』³⁶⁾の各行基伝の比較から、「墓誌」を基本として『続日本紀』は記事を挿入し、『日本靈異記』は記事を省略しながら作文していることを指摘しておられる。そして、それぞれの記述態度の相違は、その著述目的の相違に起因するとし、『続日本紀』の行基伝については寺田施入を上申するものであり、施入の対象になる寺院の重要性が強調されており、建立者が稀代の高僧であり聖武天皇を初めとして一般民衆に至るまでの帰依を得たことが具体的に述べられるという指摘を行っておられる。また、その契機としては『続日本紀』宝亀四年（七七三）十一月辛卯条に、

十一月辛卯。勅。故大僧正行基法師。戒行具足。智德兼備。先代之所推仰。後生以爲耳目。其修行之院。惣冊餘處。或先朝之日。有施入田。或本有田園。供養得濟。但其六院未預施例。由茲法藏湮廢。無復住持之徒。精舍荒涼。空餘坐禪之跡。弘道由人。實合獎勵。宜大和國菩提。登美。生馬。河内國石凝。和泉國高渚五院。各捨當郡田三町。河内國山崎院二町。所冀眞筌秘典。永洽東流。金輪寶位。恒齊北極。風雨順時。年穀豐稔。

と寺田施入が行われているが、この寺田施入に際してそれを要

請した上申文書から採録されたものと推測しておられる。⁽³⁷⁾

以上より、道照・行基ともに共通して寺院が提出した史料が原材料となつて『続日本紀』の編纂に際して採用されたものであり、その提出の契機としては各寺院が経済的な特権を要請するためのものであつたということが想定できる。

では、道慈と豎真の場合はどのような史料が材料となつたのであろうか。結論的なものを先に述べるならば、共に縁起様文書が使用されていると考えられる。先ず道慈の場合であるが、大安寺から提出された史料が当然使用されるに至つたものと考えられる。大安寺に関しては『続日本紀』神護景雲元年（七六七）三月戊午（九日）条に、

戊午。幸^二大安寺^一。授^二造寺大工正六位上輕間連鳥麻呂外從五位下^一。

とみえ、この時、大安寺に行幸があり造寺大工に授位が行われている。ただし、この日の前後には元興寺⁽³⁸⁾・西大寺⁽³⁹⁾・薬師寺⁽⁴⁰⁾等への行幸が記されており、薬師寺においても長上工以下に賜爵が行われている。薬師寺に関しては不明であるが、大安寺についてはこの時の造寺大工輕間鳥麻呂への授位は、前年の天平神護二年（七六六）二月己酉（二八日）条に、

己酉。震^二大安寺東塔^一。

と、落雷があつた東塔の再建もしくは修理作業の完成によるものと考えられる。そして、『類聚三代格』卷一五「寺田事」に

太政官符

合田六町

大和國二町一町。東十一橋本田。一町路東十二岡本田。在高市郡高市市里寺古等地西邊

右。修^二理金堂佛菩薩并步廊中門文殊維摩羅漢寺像^一新

攝津國二町一町九條五里卅五大針田。一町九條六町二丈針田。在嶋上郡兒里

右。修^二理大門中門四王并金堂力士寺像^一新

山背國二町在久世郡牧野田寺庄北邊

右。修^二理寺家新^一

以前。被^二左大臣宣^一稱。奉^レ勅。件田並永獻^二入於大安寺^一。

神護景雲元年十二月一日

とあり、諸修理料として田六町の施入が行われている。つまり、この神護景雲元年（七六七）における東塔の造営後、以後の修理のために寺田の施入が行われたと考えられるが、この時の施入には大安寺からの働きかけもあつたのであろう。そして、その申請に際して大安寺から朝廷へと提出された文書に、その縁起的な部分に大安寺の平城京移建に尽力した道慈の業績が記されていたのではないだろうか。そのため、道慈の卒伝においては、特に「属遷^二造大安寺於平城^一。勅^二法師^一勾^二當其事^一。法師尤妙^二工巧^一。構作形製皆稟^二其規模^一。所^レ有匠手莫^レ不^二歎

服^二焉。」と記されていると考えられる。

次に、鑒真の場合は唐招提寺が提出した史料によって、すなわち淡海三船撰の『唐大和上東征伝』（以下『東征伝』と略す）もしくはそれと系統を同じくする史料を材料として記されている。そして、eに「施以^二備前國水田一百町^一」。又施^二新田部親王之舊宅^一以爲^二戒院^一とみえ、備前國の水田一〇〇町と新田部親王の旧宅がともに鑒真に施されたというように記載されている。当然、これと同様の記述は『東征伝』にもみえ、

仍以寶字元年丁酉十一月廿三日、勅施備前國水田一百町、

大和上以此田、欲立伽藍、時有勅旨、施大和上園地一區、

是故一品新田部親王之舊守、

と、備前國の水田が鑒真個人に与えられ、鑒真はそれによつて伽藍すなわち唐招提寺を建立したというように具体的な記載がある^④。

しかしながら、この備前國水田一〇〇町に関しては、『続日本紀』天平宝字元年（七五七）十一月壬寅（二八日）条に、

壬寅。勅。以^二備前國墾田一百町^一。永施^二東大寺唐禪院十方衆僧供養料^一。伏願。先帝陛下薰^二此芳因^一。恒蔭^二禪林之定影^一。翼^二茲妙福^一。速乘^二智海之慧舟^一。終生^二蓮華之寶刹^一。自契^二等覺之眞如^一。皇帝皇太后。如^二日月之照臨^一。並治^二萬國^一。若^二天地之覆載^一。長育^二兆民^一。遂使^二爲^一出

世之良因^一成^中菩提之妙果^上。

とあり、唐招提寺系の史料にみえる一月二三日とその施入の日付が異なるのみならず、施入された水田については決して鑒真個人に対して与えられたという記載ではなく、『続日本紀』の記事からは「東大寺唐禪院十方衆僧供養料」として施入したとのみ記されるだけであり、唐招提寺系の史料の間に矛盾が生じている。例えば、大治五年（一一三〇）三月十三日付の「東大寺諸莊文書并絵図等目錄^⑤」に、

一備前國

二通 墾田百町 頗不具文也、仍不委注之、

とある備前國の墾田一〇〇町は、唐禪院に施入された水田を指しているものと考えられ、平安時代末においても東大寺の莊園であつたと思われる。

では、六国史にみえる唐招提寺の寺領についてみると、先ず『続日本紀』宝龜七年（七七六）六月癸亥（七日）条に、癸亥。播磨國戸五十畑捨^二招提寺^一。

とあるのが初見であり、次いで『日本後紀』延暦二三年正月戊戌（二二日）条の如宝奏言には、

戊戌。律師傳燈大法師位如寶言。招提寺者。斯唐大和上鑒眞奉^二爲聖朝^一所^レ建也。天平寶字三年。勅以^二沒官地^一賜^レ之。名爲^二招提寺^一。又以^二越前國水田六十町^一。備前國田地

十三町^一。充^二給供料^一。令^レ學^二戒法^一。以來殆五十年。雖^レ有^二經律^一。未^レ經^二披講^一。一則乖^二和上之素意^一。一則闕^二仏道之至志^一。伏望。令^下永代傳講。便用^二賜田^一。充^中律供儲^上。然則招提之宗久而無^レ廢。先師之旨沒而不^レ朽。許^レ之。

とみえ、また『日本文徳天皇実録』仁寿三年（八五三）十月丙子（一九日）条に、

丙子。招提寺田地百七十八町四段三百廿三步。永爲傳法田。初寶龜中。大唐和尚鑑眞買^二得此地^一。施^二入寺家^一。其後逐^二年墾闢^一。頃畝増廣。以^二功德故^一。聽^二不輸租^一。

とあり、これらの史料においては明らかに備前国水田一〇〇町については触れられてはおらず、朝廷より認可されていなかったために触れることができなかった可能性は存在する。しかし、『東征伝』および唐招提寺系の史料において、寺領獲得のための働きかけがあったことは明かとなる。

このことに関しては、すでに福山敏男氏が指摘しておられるように、宝亀年間以降の寺領獲得の動きのなかで、唐招提寺が自らの所領のごとく主張するようになったものと考えられる^④。すなわち、契機として考えられることとしては、唐招提寺の寺領について宝亀七年（七七六）の封戸の施入は僅かに五十戸のみであり、他の南都諸大寺と比べるとはるかに少ないものであ

り、そのため唐招提寺が東大寺唐禅院に施入された備前国水田を自らのもとに取り込むために改変を行なったということを示しているといえる。そして、遅くとも宝亀一〇年（七七九）に撰述された『東征伝』においてすでに、あたかも当初より備前国水田が鑑眞個人については唐招提寺の寺領であったかのような作偽が行なわれている。ただし、『続日本紀』の記事をみた場合、『東征伝』が直接使われているのではなく、唐招提寺から提出された縁起様文書が使われているのであろう。そして、このことはeを掲載するにあたって、唐招提寺から提出されていた史料が『続日本紀』天平宝字元年（七五七）十一月壬寅（二八日）条と明らかに矛盾するにもかかわらず、「内容が審査されることもなく承認され^⑤」た例として挙げることができる。

以上から、玄昉・道鏡を除く道照・道慈・行基・鑑眞に共通して、その卒伝の原史料となったものとして各寺院より提出された縁起様文書の存在が想定でき、その契機としては経済的な特権を政府より受けようとしたためであった。そして、『続日本紀』に卒伝が掲載されている僧侶の基準については、林氏が指摘しておられるように特別な基準が存在していたことは十分に考えられるが、加えて『続日本紀』編纂に際してその編纂材料となったものとしては、各寺院から提出され治部省に保管されていた文書が利用されたのであり、編纂材料すなわち卒伝の

素材の有無も考慮に入れるべきであろう。

三

良弁の場合であるが、以上の考察より僧侶の伝記が『続日本紀』に収録されるに際して、編纂材料となるものとして各寺院より提出された史料である縁起様文書が使用されたことを考慮するならば、良弁の場合も東大寺より提出された縁起様文書の存在が重要となる。そして、東大寺より提出された縁起様文書についても、既に水野柳太郎氏によりその存在が指摘されており、『続日本紀』編纂の材料として使用されていたことが明らかとなっている⁽¹⁶⁾。しかし、当然のことながら東大寺内における良弁の立場および当時の仏教界における地位を考えてみた場合、先にみた道照・道慈・行基・鑒真と同様にその伝記が縁起様文書に記されていたと考えて何ら差し支えはないのにも関わらず、卒伝が掲載されてはないということはいかなる理由があつたのであろうか。

良弁の卒伝が掲載されなかった理由として、宮城洋一郎氏は橘諸兄との政治的な結びつきを想定されて、反藤原氏の立場であつた橘諸兄の政治的な敗北により同様に良弁の活躍が『続日本紀』から除去されたと考えておられる⁽¹⁷⁾。また松本信道氏は、

宮城説に対して「反藤原氏の立場」にあつた道鏡が「除去」されずに収録されていることの矛盾、『東大寺要録』の良弁関係記事の史料的価値を高く評価されているという二つの疑問点を提起されながらも、宮城説を継承されて、同時に『続日本紀』の成立事情を踏まえた上で良弁の卒伝が削除されたということを示唆しておられる。つまり、良弁の卒去記事の当該巻である巻三二の編纂過程から卒伝の有無について、「修正」の際に何らかの価値判断に基づく「除去」がなされた場合と、当初より良弁の伝記が収載されていなかった場合の両方の可能性を提起された上で、先にも述べた『続日本紀』の薨卒伝の材料として、一般の記事とは別個に伝記の形を取って存在していた、および『続日本紀』の編纂材料として東大寺提出の文書が採用されていたという林・水野両氏の研究をもとに削除の可能性を指摘しておられる⁽¹⁸⁾。

しかし、良弁の卒伝が『続日本紀』から削除されたとするならば、卒去記事自体が削除の対象となるのが当然であり、卒伝のみ削除されたとは考えにくい。また、その卒去記事に関しても再考の余地があるように思われる。

例えば、④の記事において「閏十月」は元来諸本では欠落しており、「僧正良弁」とあるのも諸本に「僧良弁」とあつたものがそれぞれ訂正されていることなどであるが、いずれも伝写

の間に錯簡が生じたものと考えられる。ただし、「僧正」という肩書は本来は「僧」とのみ記載されていたものが訂正されたものであり、卒去時点で僧綱を致仕していたのではないかという推測も成立する。このことは、一つには良弁の年齢にもよると考えることができる。良弁の生年は一応持統三年（六八九）ということであり、⁵⁰宝亀四年の時点では八五歳⁵¹という高齢であり、俗にあつては賑給を受ける年齢でもある。また、実際かつて鑒真について『続日本紀』天平宝字二年八月庚子朔条には、

其大僧都鑒真和上。戒行轉潔。白頭不變。遠涉^二滄波^一。

歸^二我聖朝^一。号曰^二大和上^一。恭敬供養。政事躁煩。不^二敢勞^レ老。宜^レ停^二僧綱之任^一。集^二諸寺僧尼^一。欲^レ學^二戒律^一者。皆属令^レ習。

とみえ、高齢によつて僧綱の任を解かれている。良弁と鑒真の場合を同一に考えることはできないとしても、僧綱の辞任に際して高齢ということが理由とも成りえる余地は認められる。しかし、弔使を派遣しているということと、卒去記事が記されているということから考えて、僧正に在任のまま卒去したものと考えられる。

ただし、卒去の日付に関しては、堀池春峰氏によれば良弁の卒去年月日については数説が存在し⁵²、

A 宝亀四年（七七三）十一月一六日…『七大寺年表』

B 宝亀四年（七七三）閏十一月一六日…『東大寺要録』『元亨釈書』

C 宝亀四年（七七三）閏十一月二四日…『続日本紀』

D 天平宝字五年（七六一）十一月一六日…『南都高僧伝』

以上の四説が存在する。⁵³Dの天平宝字五年卒去説に関しては、『続日本紀』の記事と明らかに矛盾し、さらに天平宝字五年以降も『大日本古文書』等に良弁の名が見えることから当然退けられるべきである。そうすると、ABCの三説が残る良弁の卒去年は宝亀四年ということで異存はないであろうが、その月日が問題となる。すなわち、閏月かどうか、一六日か二四日かという二点が問題となる。先ず前者であるが、Aの『七大寺年表』以外は閏十一月であり、「閏」の一字が伝写の際に欠落したものと考えられる。

そして、日付に関しては『続日本紀』のみが二四日説を記しているものであり、その他の三説は全て一六日という日付を採用している。これは良弁の卒去の日付に関して、『続日本紀』が採用した日付と『東大寺要録』等の東大寺に伝えられている史料等の日付が異なるということを示している。つまり、『続日本紀』における東大寺関係の記事の場合、東大寺より提出された縁起様文書が編纂材料として使われているということを考慮するならば、良弁の卒去の日付に関しては東大寺側の史料が採

用されていないということになる。

ところで、『続日本紀』の同年閏十一月辛酉（二一日）条に僧綱の賻物に関する記事が以下のように記されており、

辛酉。詔。僧正賻物准「從四位」。大少僧都准「正五位」。

律師准「從五位」。

とみえる。『続日本紀』にあつてはこの辛酉（二一日）の詔は良弁の卒去の三日前に当り、良弁の卒去と無関係ではないが、同時にその意趣には僧正・大僧都・律師に階差を付けることであつたと指摘されている。^③

僧綱に対する賻物は、『令集解』喪葬令職事官条の令釈に引用されている大宝元年（七〇一）七月四日勅裁に、

七月四日勅裁。僧綱賻物者。僧正准「正五位」。大少僧都

律師並准「從五位」給之。

とみえ、僧正とそれ以外の大小僧都律師との間において格差が見られる。それに対して、この宝龜四年（七七三）閏十一月辛酉の詔ではさらに大少僧都と律師との間にも格差が付けられている。確かに、これは良弁のみが優遇された措置ではなく、以後の僧正あるいは僧綱についても同様の待遇が与えられることとなり、良弁の卒去との直接的な関係は薄いように感じられる。しかし、『続日本紀』の記載に従うならば、良弁の卒去前にこの賻物に関する規定の変更が行われ、まさに良弁の卒去に際

しての措置であると考えることができる。『続日本紀』以外の史料では良弁の卒去は当然のことながら規定変更の前であり、

『続日本紀』では良弁の卒去前に執られた措置ということとなる。ただし、僧綱あるいは僧侶の卒去に際して賻物が特別に出された例が全く無いわけではなく、例えば良弁の師であり同じく僧正で卒した義淵は卒去に際して純一百疋・絲二百約・綿三百屯・布二百端を賜わっている。これは先に挙げた規定では、僧正の賻物が正五位に準じていたことからすると、喪葬令職事官条では正五位の賻物が「純十一疋。布四十四端。鐵二連。」であつたのに比べ例外といえる措置であつた。この義淵の場合は特別であつたとしても、良弁に対しても何等かの措置が採られたと考えてもよく、この場合僧綱の賻物の変更にその意味が含まれていたとして差し支えないであろう。しかし、その措置は普通死去する前になされたとするよりも、当然その死後に行われたと考える方が自然である。従つて、良弁が卒去したのは閏十一月二一日ではなく、五日前の一六日であつたということが出来る。

このように、死去の日付が二説存在するというのは、決して良弁のみというわけではない。例えば、光仁天皇の父である志貴親王について、その薨去については『続日本紀』靈龜二年（七一六）八月甲寅（二一日）条に、

甲寅。二品志貴親王薨。遣^二從四位下六人部王。正五位下縣大養宿祢筑紫^一。監^二護喪事^一。親王天智天皇第七之皇子也。寶龜元年。追尊稱^下御^二春日宮^一天皇^上。

とみえる。しかし、『類聚三代格』卷一七「七国諱追号并改姓名事」の宝龜三年（七七二）五月八日勅には

勅。先帝丙辰年八月九日崩。施基皇子。天智天皇第三之皇子。白壁天皇即位之後追稱御春日宮天皇。寶龜二年。山陵在大和國添上郡田原村。

皇太后己酉年九月十四日崩。和銅二年。

右件御墓自今以後。稱^二山陵^一。

とあり、志貴親王の薨じた日付について『続日本紀』の八月一日に対して八月九日であり、日付に関して二日の相違がみられる。志貴親王が光仁天皇の父であることを考えるならば、当然その薨去の日付に間違いがあるはずはなく、この場合は『続日本紀』の日付は喪事を監護する使が出された日付であろうと考えられている³⁵。

つまり、『続日本紀』に記載されている薨卒の日付について厳密に記されているわけではなく、編纂に際して採用した史料によっては若干の相違が生じる場合があるといえる。そして、良弁の場合については『続日本紀』編纂に際して東大寺から縁起様文書が提出されていたにもかかわらず、良弁の卒去について東大寺側の史料が使われていないということになり、政府

に残っていた弔使の派遣記録をもとに記されたことになる。これは故意に編纂時に東大寺側の史料を無視した可能性もあるが、むしろ東大寺が提出した史料に良弁のことが記されていなかった可能性が大きい。そして、東大寺が縁起様文書を提出した背景を考えてみると、東大寺の場合も経済的な特権のためであったということが指摘できる。

すなわち、東大寺に与えられた食封であるが、『続日本記』

天平勝宝二年（七五〇）二月壬午（二三日）条に

壬午。益^二大倭金光明寺封三千五百戸^一。通^レ前五千戸。

とあり、この時点で東大寺に合計五〇〇〇戸の食封が与えられている。ただし、同書天平勝宝元年（七四九）十二月丁亥（二七日）条にも、

丁亥。（中略）施^二東大寺封四千戸。奴婢百人。婢百人^一。又

預^二造東大寺一人。隨^レ勞叙^レ位有^レ差。

とあり、同一書の中で矛盾があるが、これは両者の記事の材料となった史料の相違によるものであるが、東大寺に五〇〇〇戸の食封が与えられていたという事実に關してはなんら異論はない。そして、この食封はその後天平宝字四年（七六〇）七月庚戌（二三日）条では、

又勅曰。東大寺封五千戸者。平城宮御宇後太上天皇皇帝皇太后。以^二去天平勝寶二年二月廿三日^一。專^レ自參^二向於東大寺^一。

永用^二件封^一入^二寺家^一訖。而造^レ寺了後。種々用事未^レ宣^二分明^一。因^レ茲。今追議^下定營^三造修^二理塔精舍^一分一千戸。供^二養三寶^一并常住僧分二千戸。官家修^二行諸佛事^一分二千戸^上。

とあり、食封五〇〇〇戸の用途についてそれぞれ「營造修理塔寺精舍分一千戸」「供養三寶并常住僧分二千戸」「官家修行諸佛事分二千戸」と定められている。

その後、『類聚三代格』巻第八「封戸事」に収められている大同三年（八〇八）三月二六日官符には、

太政官符

應^三官家功德分封物依^レ舊收^二東大寺^一事

右檢^二案内^一。太政官去延暦十四年六月十一日下^二民部省^一符稱。太政官去寶龜十一年十二月十日下^二造東大寺司^一符稱。被^二内大臣宣^一稱。奉^レ勅。東大寺封五千戸。就^レ中官家修行諸佛事分二千戸。宜^下收^二於別庫^一以充^二每^レ年安居國忌及雜齋會料用度^一。仍^三綱寺司^二與^一諸司^一相對出納^上者。右大臣宣。奉^レ勅。件物收^二置別倉^一出納。諸司往還有^レ煩。宜^下自今以後收^二納官庫^一。修行功德之日隨^レ用出充^上者。今右大臣宣。奉^レ勅。詔書稱。朕有^レ所思。宜^下其依^レ舊還^二收寺家^一充^中用佛事^上。仍大和國司與^二僧綱及三綱^一。計^二會出納^一者。宜^下依^二詔書并寶龜十一年十二月十日符^一。依^レ

舊收^二納當寺別庫^一。充^二用官家修功德分^一。國司諸綱相對。出^二納其收物^一。畢即申^二民部省^一。至^二於出用^一。待^二官符^一行^上。仍年終造^二納物并用殘等帳^一申送。

大同三年三月廿六日

とあり、宝龜一年（七八〇）に寺家の管理下から分離されていた「官家修行諸佛事分」の二〇〇〇戸が、この時点で寺家に戻されている。しかし、『日本後紀』弘仁三年（八一二）一月癸丑（廿八日）条では、

癸丑。官家功德封物。停^レ收^二東大寺^一。收^二造東西二寺諸司^一。出納充用之色。一依^二前例^一。

とあり、再び「官家功德封物」が東大寺より切り離され、造東寺司・造西寺司に与えられている。これは東大寺にとって封戸を削られるという、経済的特権の喪失を意味するものであり、この処分はこの後変更はみられないが、光仁朝以後の東大寺に対する政府の対応に寺家が不安を抱き、その地位の回復を図ることは当然であつたと考えられ、そのために聖武天皇をはじめとする天皇家との関係を強調する必要があつたのであろう。

以上のことから、東大寺が提出した文書において良弁より、むしろ「聖武天皇或は孝謙天皇施入目的を強調²⁵」することに重点が置かれていたといえる。同様のことは、現在正倉院に伝来する「聖武天皇勅書銅版」（以下「勅書銅版」と略す）につい

ともいえる。この「勅書銅版」に関しては、中井真孝氏が『延暦僧録』の「聖武天皇菩薩伝」の文章との詳細な比較を行うことにより、『延暦僧録』が「勅書銅版」を引用したのではなく、延暦七年（七八八）を上限として、逆に「勅書銅版」の方が『延暦僧録』を引用した可能性を導き出しておられる⁽³⁸⁾。

さらに、鈴木景二氏は中井氏の説を踏まえた上で、「勅書銅版」の裏面の考察も併せ行われた結果、「勅書銅版」の制作動機について、東大寺の経済的特権を、古代的権威によって正当化する意図をもって制作された可能性を指摘しておられる⁽³⁹⁾。

ただし、「勅書銅版」については東野治之氏がその稿本として「国分銘文刻版稿」に注目されて、その書風などの検討から天平宝字七年（七六三）ごろ、東大寺の塔に納めるべく作成されたことを論じておられる⁽⁴⁰⁾。確かに、東野氏の考察には傾聴すべき点が多いが、「勅書銅版」自体の制作時期についてもあくまでも書風よりの推定であり、書風という点では説得力がやや弱いのではないだろうか、この点については別の機会に考えてみたい。

しかし、「勅書銅版」制作の動機を考えてみるならば、平安時代以前に製作されたものとは考え難く、むしろ平安時代に東大寺が自らの権利を主張するために、聖武天皇・孝謙天皇といった天皇との関係を強調するために作り出したものであるとい

える。また仮に、東野氏の指摘のように奈良時代の製作であったとしても、このように東大寺における寺家の権威付けに際しては、良弁の功績よりもむしろ聖武天皇の存在に重点が置かれていたといえる。その結果、東大寺が提出した縁起様文書に良弁の事蹟を記載することがなかったものと考えられる。

付け加えるならば、良弁と同じく卒去記事しか掲載されていない義淵であるが、確かに『続日本記』神龜五年（七二八）一〇月壬午（二〇日）条には、

冬十月壬午。僧正義淵法師卒。遣^二治部官人^一。監^二護喪事^一。又詔贈^二純一百疋。絲二百紵。綿三百屯。布二百端^一。

と、卒去の事実および喪事に治部省の官人が監護のために派遣され、詔によって賻物が与えられたということが記されているが、卒伝は掲載されていない。しかし、『続日本記』神龜四年（七二七）一二月丁丑（二〇日）条では、

十二月丁丑。勅曰。僧正義淵法師。^{俗姓也。}檀枝早茂。法梁惟隆。扇^二玄風於四方^一。照^二惠炬於三界^一。加以。自^二先帝御世^一。迄^二于朕代^一。供^二奉内裏^一。無^二咎愆^一。念斯若人。年徳共隆。宜^下改^二市往氏^一。賜^二岡連姓^一。傳^中其兄弟^上。

とみえ、義淵が褒賞されるに際してその兄弟にも賜姓されている。ここにみえる記事は、簡単ではあるが卒伝に類する記載で

あると考えられ、係累的な記事に加えて伝記的な記事も含まれており、一二月丁丑条にこの記事を記載したために卒伝が記されることが無かったのではないだろうか。そして、この義淵の伝記は龍蓋寺（岡寺）から提出された縁起様文書に記されていたと考えられ、『続日本紀』天平宝字六年（七六二）四月壬申（二三日）条には、

壬申。勅越前國江沼郡山背郷戸五十烟施^二入岡寺^一。

と、封戸の施入が行われているのが契機になると考えられる。^⑧

従って、『続日本紀』に卒去記事が記載されている八名の僧侶の中で、明らかに伝記記事が掲載されていないのは良弁のみであるということが出来る。これは、決して良弁が東大寺において軽んじられていたというわけではなく、寺家の権威付けが聖武天皇をはじめとする天皇家の権威によって行われていたからであると同時に、『続日本紀』が編纂された延暦年間においては良弁の伝記が未編纂であったからではないだろうか。例えば、思託の撰になる『延暦僧録』であるが、現在散逸して伝わらないものの、『東大寺要録』をはじめ鎌倉時代の東大寺僧宗性撰の『日本高僧伝要文抄』などにその逸文が散見するが、東大寺において「根本僧正」と称される良弁に関するものは全く見当たらず、このことから『延暦僧録』には良弁伝が記されていない可能性は十分にあったと思われる。

以上、良弁の卒伝が『続日本紀』に掲載されなかった理由として、東大寺から提出された縁起様文書に良弁について触れることがなかったと推測できる。つまり、寺家が作成・提出した縁起様文書には、その創建に關してあるいは食封等の起源について、聖武天皇をはじめとする天皇家との關係を強調することに重点を置いていたためであり、『続日本紀』編纂の時点で、良弁の伝記は成立していなかったということが考えられる。従って、延暦期における良弁に対する評価は決して低いものではなく、むしろ卒去記事が『続日本紀』に掲載されたということとを考えるならば、その評価を窺い知ることが可能であり、むしろ重要視されていたであろうことが明かとなる。また、『続日本紀』に卒去記事や卒伝が記されている僧は、玄昉・道鏡を除く六名に關しては宗教の伝来者あるいはその経歴などが基準となつてゐることは否めないが、その材料として寺院より提出された縁起様文書が用いられていることを考えると、卒伝の記される条件の一つとして主要寺院の開基もしくは開基的な存在であつたということが出来る。そして、縁起様文書に伝記が記される条件としては、各寺院の権威付けのためにも天皇もしくは天皇家との關係が重要な要因の一つであつたといえよう。

註

- (1) 中井真孝「奈良時代の僧綱」(同『日本古代仏教制度史の研究』所収、法蔵館、一九九一年、初出は一九八〇年、九四～一〇四頁。
- (2) 本郷真紹「宝亀年間に於ける僧綱の変容」(『史林』第六八巻第二号所収、一九八五年)。
- (3) 中井前掲註(1)論文、一〇三頁。
- (4) 岸俊男「良弁伝の一餉」(同『古代文物の研究』へ塙書房、一九八八年)所収、初出は一九八〇年、四一二～四一四頁。
- (5) 岸前掲註(4)論文、四一四頁。
- (6) 石原正明「冠位通考」(『百家叢説』三)。
- (7) 山田英雄「古代における僧位」(同『日本古代史攷』所収、岩波書店、一九八七年七月、初出は一九六四年)。
- (8) 岸前掲註(4)論文において、諸良弁伝に関する考察が行われている(四〇七～四一二頁)。
- (9) 筒井寛秀校訂『東大寺要録』(国書刊行会、一九七一年二月)、二九～三〇頁。
- (10) 松本信道①「『東大寺要録』良弁伝について」(『駒沢史学』第二九号、一九八二年三月)、②「漆部直伊波と染屋時忠—良弁伝研究の一助として」(『秦野市史研究』二、一九八二年三月)、③「漆部直伊波と相模国」(『秦野市史研究』三、一九八三年三月)。
- (11) 松本前掲註(10)①論文、四二頁。
- (12) 久野健「三月堂執金剛神像」(『美術研究』一五二号、一九九四年)。
- (13) 松本前掲註(10)①論文、四〇頁。
- (14) 松本前掲註(10)①論文、三六頁。
- (15) 坂本太郎「六国史と伝記」(同『日本古代史の基礎的考察』上巻、東京大学出版会、一九六四年、初出は同年)。
- (16) 林陸朗「『続日本紀』記載の伝記について」(岩橋小彌太博士頌寿記念会編『日本史籍論集』上巻、吉川弘文館、一九六九年)。
- (17) 林前掲註(16)論文、一二二～一二三頁。
- (18) 佐伯有清「智証大師伝の研究」(吉川弘文館、一九八九年、四二六～四二七頁)。
- (19) 井上光貞他校注「律令」(日本思想大系三、岩波書店、一九七六年)、一六六頁。
- (20) 佐伯前掲註(18)著書に校訂されている「智証大師伝」による(四二六頁)。
- (21) 坂本前掲註(15)論文、三〇二～三〇四頁。
- (22) 『続日本紀』文武四年(七〇〇)三月己未(十日)条。
- (23) 『続日本紀』神龜五年(七二八)十月壬午(二十日)条。
- (24) 『続日本紀』天平十六年(七四四)十月辛卯(二日)条。
- (25) 『続日本紀』天平十八年(七四六)六月己亥(十八日)条。
- (26) 『続日本紀』天平勝宝元年(七四九)二月丁酉(二日)条。
- (27) 『続日本紀』天平宝字七年(七六三)五月戊申(六日)条。
- (28) 『続日本紀』宝龜三年(七七二)四月丁巳(七日)条。
- (29) 中井前掲註(1)論文、一〇三頁。
- (30) 林前掲註(16)論文、一三五～一三九頁。
- (31) 林前掲註(16)論文、一三八～一三九頁。
- (32) 水野柳太郎a「道照伝考」(『奈良史学』第一号、一九八三年)、b「行基の大仏官人記事めぐって—『続日本紀』卷十五天平十五年十月乙酉条—」(『続日本紀研究』第三〇〇号、一九九六年)。
- (33) 『日本書紀』上巻第二二話「勤王学仏教、法利物、臨命終時、示異表縁第廿二」。
- (34) 『日本三代実録』元慶元年(八七七)二月一六日壬午条。

(35) 水野前掲註(32) a 論文。

(36) 『日本靈異記』中巻第七話「智者誹妬變化聖人、而現至閻羅關、受地獄苦緣第七」、中巻第三〇話「行基大德、携子女人視過去怨、今投淵、示異表緣第卅」。

(37) 水野前掲註(32) b 論文。

(38) 『続日本紀』神護景雲元年(七六七)三月辛亥(二日)条。

(39) 『続日本紀』神護景雲元年(七六七)三月壬子(三日)条。

(40) 『続日本紀』神護景雲元年三月癸亥(十四日)条。

(41) ただし、この備前国水田については「招提千歳伝記」巻下之二には、天平宝字三年(七五九)のこととして、「九月十五日。壇及堂成。有落慶法樂。(中略)次日今上勅以田納千當寺。」と、唐招提寺の建立直後に寺に施入されたとする史料も存在する。

(42) 竹内理三編『寧楽遺文』(東京堂出版、一九六二年)九〇六頁。

(43) 『類聚三代格』巻第二「経論并法会請僧事」に、

太政官符

應令「招提寺爲例講」律事

四分律一部七十卷

疏一部十卷

釋法砺撰華嚴經一部八十卷

涅槃經一部卅六

大集經一部卅卷

摩訶般若波羅密經一部卅卷

已上在「寺内」

田地一十三町在備前國

寶龜八年七月廿六日官符

水田六十町在越前國

用「知識物」所買

右得「律師傳燈大法師位加寶牒」係。件寺者斯唐大和上暨真奉「爲聖朝」之所「建也。去天平寶字三年。勅以「没官地」賜之。名爲「招提寺」。令「修「學戒法」。余來殆五十年。雖有「經律」。未「經」披講」。一則乖「和上之素意」。一則闕「佛道之至志」。伏望。下「符」寺家」。永代傳講。便用二件田。充「律供儲」。然則招提之宗。久而無廢。先師「旨」。没血不朽焉。右大臣「良弁」。奉勅依

良弁と『続日本紀』

請。

延暦廿三年正月廿二日

と、『日本後紀』と同日付の太政官符が収められている。

(44) 福山敏男「唐招提寺金堂の建立年代」(同『寺院建立の研究』中(福山敏男著作集二、中央公論美術出版、一九八二年)、初出は一九四〇年)、一八四〜一八五頁。

(45) 水野前掲註(32) b 論文、六七頁。

(46) 水野柳太郎「続日本紀編纂の材料について―東大寺の食封をめぐる―」(『ヒストリア』第二八号、一九六〇年)。

(47) 宮城洋一郎「東大寺の成立について」(『龍谷大學仏教文化研究所紀要』第一九集、一九八〇年)、八四頁。

(48) 松本前掲註(10) ①論文、三五〜三八頁。

(49) 新訂増補国史大系『続日本紀』の頭註には「閏十一月、今推補」「正、據金本堀本補」とある。

(50) 坂本太郎・平野邦雄監修『日本古代氏族人名辞典』(吉川弘文館、一九九〇年)の「良弁」の項参照(六八九〜六九〇頁)。ただし、良弁の年齢については当時の史料には見えず、後世の史料に散見するのみである。

(51) 前掲の『東大寺要録』巻第一本願章第一には「寶龜四年補僧正年八。同年閏十一月十六日入滅。」とある(前掲註(6)三〇頁)。

(52) 堀池春峰「華盟講説よりみた良弁と審詳」(同『南部仏教史の研究』上 東大寺篇、法蔵館、一九八〇年、初出は一九七三年)、三八頁。

(53) 堀池氏は『続日本紀』の紀年を訂正前の十一月二十四日としておられるが、現行本の記載に従い閏十一月としておく(前掲註(42)論文、三八八頁)。

(54) 中井前掲註(1)論文、八一頁。

- (55) 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注新日本古典文学大系一三『続日本紀』二(岩波書店、一九九〇年)、補注7-19(四六〇-四六一頁)。
- (56) 水野前掲註(46)論文、二六頁。
- (57) 水野前掲註(46)論文、三五頁。
- (58) 中井真孝「延暦僧録と国分寺建立勅」(同氏前掲註(1)著書所収、初出は一九七六年、二四一-二四五頁)。
- (59) 鈴木景二「聖武天皇勅書銅板と東大寺」(『奈良史学』第五号、一九八七年)。
- (60) 東野治之「古代の書と文章」(『岩波講座日本通史』第六卷、岩波書店、一九九五年)。
- (61) 拙稿「義淵と僧綱」(『佛教史學研究』第四〇卷第二号、一九九七年)。